シリーズ　尻屋埼灯台（第３回）～点灯１３６周年 その歴史は①～

八戸海上保安部

【初期の尻屋埼灯台　～時代の先端を駆ける灯台～】

日本の灯台が電化されたのは、明治３４年（１９０１年）１２月、尻屋埼灯台でアーク灯を点じたのが初めてです。この光学装置はフランスの灯台をモデルにしたもので、アラード式電気弧光灯といいます。この改良により光度は３万６千燭光（１燭光はろうそく１本分の火）から一躍１３００万燭光になり、その明るさは「海の太陽」と航海者からたたえられるほどでした。しかしながら、設備費が嵩み、取り扱いがわずらわしいことから、アーク灯は姿を消すこととなりました。

昭和７年（１９３２年）には無線方位信号所が併設され、光波、音波、電波の航路標識を有する我が国屈指の灯台となります。昭和１３年（１９３８年）からは気象観測データを中央気象台に送信する業務が加わり、昭和２９年（１９５４年）からは船舶に向けて地域の気象、海象を知らせる船舶気象通報業務を開始します。

さて、この時代の灯台の管理がどうなっていたのかというと・・・、昭和２０年代頃までにおける主要灯台には職員の常駐が義務付けられ、昼夜の別なくこれを管理していました。よって、灯台のあるところ、職員とその家族の生活がありました。そして、それはここ尻屋埼灯台においても同じでした。

【太平洋戦争と尻屋埼灯台　～尻屋埼灯台 空襲される～】

昭和１６年（１９４１年）１２月、日本はアメリカとイギリスに宣戦布告し、太平洋戦争に突入しました。本土が空襲にさらされるようになると、灯台は、いち早く敵機を発見することができる絶好の位置にあることから防空監視網に組み入れられ、各灯台では防空及び海上監視を行うことになりました。

このころの状況を、海上保安庁ＯＢの３２年間に及ぶ灯台守としての思い出を綴った回想録「おんぼろ人生敢闘記（清元鉄男氏著書）」にある次の一文から窺い知ることが出来ます。

『一時の措置であったが、当初、灯台職員は「代員をもって替え難い官吏（かんり：国家公務員のこと）」として兵役を免除され、私は終戦まで軍の招集は全くなかった。しかし、灯台そのものは空襲の格好の目標となり、開戦と同時に戦場と化したのである。（略）』

このように、本土への空襲が激化するにつれて、灯台もその目標とされました。昭和２０年（１９４５年）に入るとアメリカ軍の攻撃は更に激しくなり、各地の灯台は航空機による機銃掃射、爆撃、艦砲射撃等によって破壊されました。これらの攻撃により、多くの灯台職員が殉職しました。

尻屋埼灯台は、終戦のひと月前の昭和２０年７月１４日の敵艦載機の攻撃に始まり、終戦までに計１４回も襲撃され、各施設は破壊されました。これにより、尻屋埼灯台は点灯不能を余儀なくされてしまいました。そして、米軍艦載機の銃弾を受け、村尾技手が無線通信室で殉職しました。村尾技手は、無線で連絡しようと顔を窓に寄せたところを撃たれたそうです。

太平洋戦争のつめ跡は、今も尻屋埼灯台に残っています。灯台の灯籠部には艦載機の機銃掃射により穴だらけとなった箇所を補修した後が、はっきりと残っています。

～ お 詫 び ～

広報ひがしどおり（第５５７号）おいて誤りがありましたので訂正致します。
１２ページ　自衛官採用試験のお知らせ　一般曹候補生（第１次）の応募資格　について
【誤】平成４年４月２日から平成７年４月１日までの間に生まれた方
【正】昭和６１年４月２日から平成７年４月１日までの間に生まれた方
訂正して深くお詫びいたします。